



[令和 2 年 3 月 11 日 定例会発表要旨]

手稲の火事

手稲郷土史研究会 会員 沖田 紘 昭

このたびの研究発表の内容は、手稲郷土史研究会が平成 22 年に発行した『史料に見る手稲今昔 手稲歴史年表』と札幌市手稲消防団が平成 6 年に刊行した『札幌市手稲消防団之記録 あゆみ』が、その主な出どころとなっている。また当日添付した資料の多くは、『史料に見る手稲今昔 手稲歴史年表』の出典番号をもとに、道立文書館で『北海道毎日新聞』と『北海タイムス』のマイクロフィルムから探し出したものである（道庁赤れんが庁舎内に開設当時）。



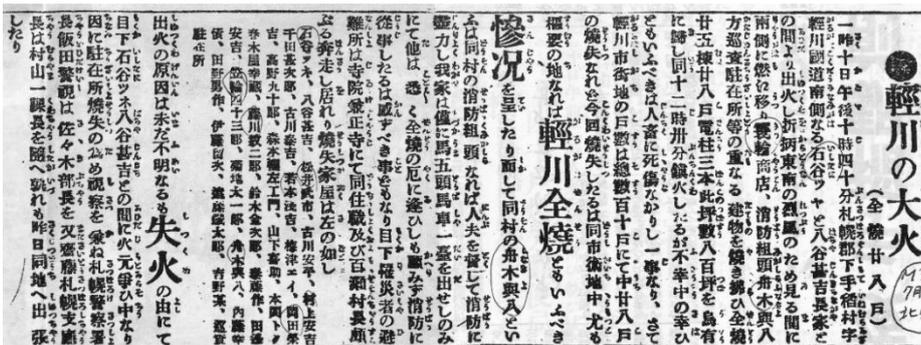
明治初期の手稲の火事は、主に山口村で起きている。これらの火事のほとんどは開墾のための火入れが延焼したもので、なんと全てが人為的な原因であった。手稲北小学校の前身、山口村の「生田寺小屋」が明治 19 年、明治 32 年にも山口尋常小学校が留守人の不注意から全焼している。

軽川駅（現 手稲駅）の南側、下手稲村の頃からの中心商店街は、都合四回の大火に見舞われている。一回目の火事は明治 19 年で『手稲町誌』に「市街地の大部分を消失した」とあるが、詳細は不明である。二回目は明治 39 年、三回目は昭和 19 年、四回目は昭和 41 年で、それぞれ新聞記事を見つけ 資料として紹介した。明治 39 年のときは、市街地の約三分の一に当たる 50 余戸を焼失した。昭和 19 年のときには 21 戸が全焼している。昭和 41 年のときは、パー「山小屋」のルンペンストーブの過熱から出火し、5 世帯 18 人が焼け出された。いずれの火事も不幸中の幸いと言うべきか、焼死者が無かったようである。

手稲中央小学校は明治 38 年（下手稲尋常小学校）と、昭和 4 年（下手稲尋常高等小学校）の二回出火し、全焼している。一回目のときは、「藤の湯」の厚意により、臨時の教室（「藤の湯」の脱衣場及び洗い場とも 近くの旅館とも）を提供された在校生の感謝の思い出が記録に残っている。

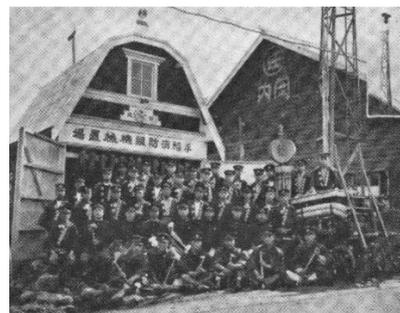
手稲の消防のはじまりは、私設組織から出発している。明治 28 年、軽川市街地だけでも戸数は 100 戸を数えるようになり、村上藤吉 以下有志 30 名は市街地を中心とした防災を確立するため「軽川消防組」を組織した。これが手稲における消防の創始である。その後、「公立手稲消防組」の船木與八、「手稲消防団」の乙黒定七へと受け継がれていく。このたび、昨年まで札幌市手稲消防団

の団長を務められた富丘 在住の安澤正美さんから、貴重な体験談をお聞きし、発表時にも披露する事ができた。とくに「手稲ルカ病院」の火事、「明治牧場」の火事、北海道工業大学裏で発生した野火について詳しく語っていただいた。



「軽川の大火」を報じる明治 39 年 7 月 12 日付『北海タイムス』

死を覚悟したことも二度三度、終始緊張して過ごされた数十年におよぶ団員生活であった。歴史を振り返り、改めて私たちは、地域のためにボランティアとして立ち上がったこれらの方々に衷心よりの謝意を述べねばならない。



『あゆみ』に掲載された手稲消防組

明治44年5月上旬、全道各地で一斉に火の手があがった。『北海道山林史』によれば、このときの総火災件数は523件、焼失面積387,000町歩と記されている。島牧、八雲、稚内、枝幸、白瀧などの市街地を山火事が襲い、小樽、余市、美国、野塚、美唄、富良野、渚滑、札幌の円山、藻岩山にいたる前代も現代も未聞の北海道全域に広がる大災害であった。あまり知られていないこの災害に名前をつければ、まさに「北海道群発大火災」となる。しかし、このとき手稲では火災が無かった。いや正確に言えばあったが、大きな努力によって食い止められていたのである。「北海道造林合資会社」は手稲山系におよそ1万町歩の山林を持つ事業体であったが、日頃から山火事への備えを怠らなかつた。当日は円山方面と銭函方面の二カ所から火の手が上がり、事業地へ迫っていた。村民に伝え200余名の協力者がすぐに集まり、二手に分かれて社員が指揮を執り、火防線を造り、木を切り倒し、下草を刈り払い、あるいは向火にて延焼を食い止めたのである。この手稲の誇り高い話も、ぜひ消防の歴史の1ページに加えてもらいたいものである。

一番手稲らしい火事と言えば語弊があるかもしれないが、泥炭地帯で発生した野火ではないだろうか。大きな火災が昭和41年、51年と起きている。丸一カ月近くも消えては発火を繰り返し燃え続く異常な火事で、第6次出動まで記録されている。ついに人手では不可能と諦め、ブルドーザで熾になった泥炭を反転しながら消し止めたとのこと。安澤さんの忘れられない思い出の一つだ。

火災悲劇の極みとして、二件の火事を取り上げたい。いずれも手稲の火事ではないが、昭和18年3月の倶知安町の映画館「布袋座」の火災と、昭和27年8月の札幌中心街での「日の出會館」の火災である。年表によれば「布袋座」では208名の焼死者となっているが、当時を知る手稲郷土史研究会の永井会長のお話では、「雪が深く非常口が開かなかつたため、入口に殺到し倒れ、多くは圧死した」とのこと。「日の出會館」の火災では、女店員など8名が焼死。深夜の火事で、3・4階に寝ていた従業員が非常口のない違反建築のため、次々と窓から飛び降りて道路に打ちのめされるといふ修羅場をみた。いずれも防災史上に数々の問題提起をし、長く語られてきた事件であった。

最も愚かな火災と言えば、戦争によるものではないだろうか。この手稲にも昭和20年の終戦直前に米機グラマンが飛来し、「日本石油」のタンク群を銃撃。真っ黒い入道雲のような煙を吐きながら三日間も炎上した。昼夜を問わず火災と煙に覆われた村人たちの不安は、想像することもできない。

災害は人類に教訓を残すが、いざ当時の被災者の気持ちを思うと胸に詰まるものがあるのも事実である。手稲の全ての被災者に合掌を。

最後になりますが、貴重な体験談をお聞かせいただいた手稲消防団の元団長 安澤正美さん、『札幌市手稲消防団之記録 あゆみ』を貸して下さった当会の一ノ宮相談役にお礼申し上げます。



★ 手稲郷土史研究会「定例会」の開催時刻について 令和2年5月から10月までは午後6時15分開会、11月から令和3年3月までは午後1時30分開会となります（毎月第二水曜日）。

次回定例会 ⇒ 発表内容「画家 富樫正雄と手稲」／乙黒通子（手稲郷土史研究会 会員）

5月13日（水）18:15～／手稲区民センター3階 視聴覚室／当研究会の会員でない方の聴講も可